

# 文革後期における青年たちの読書と思想的探求

印 紅標  
土屋昌明訳

1966年5月の中国共産党中央政治局拡大会議から1969年4月の中国共産党第9回全国代表大会までが、文化大革命における主段階であった。この段階では、毛沢東が大規模な大衆運動を発動して党内闘争に参加させ、劉少奇ら一群の指導者幹部を攻撃した。

1969年4月の中国共産党第9回全国代表大会から1976年10月までは、文化大革命（以下、文革）の後続段階〔文革後期〕である。この7年あまりの時間には、大衆の造反運動は収束したが、文革の誤りは正されず、国家と人民は正常な社会生活を回復しないまま、青年たちの運命も不安定な状態に置かれていた。

この時期、青年たちの多くは社会の底辺にいて、当局の思想・文化的なコントロール圏外の辺境あるいは間隙に身を置き、独自に読書と思想的探求の活動を展開した。彼らの思想は次第に変化をとげ、毛沢東を信奉する思想から当局の主流イデオロギーを批判する観点へと方向転換した。一部の青年たちの独自の思想的探求は1968年の紅衛兵運動の退潮時期からすでに始まっていた。

## 1 読書活動

1996年、上海の学者である朱学勤は、和小県という河南の農村での読書生活を回想して次のように述べている。

河南の小さな町で、一群の高卒青年労働者が、仕事の引けた後、貧困にしてかつ贅沢ともいべき思索生活をおくっていた。彼ら自身の社会的身分に似合わず、また周囲のあの小さな町にありがちな雰囲気とも違和感があった。彼らは非知識人の身でありながら、正常な時代なら知識人が討論するのを常とするような諸問題を激烈に議論していた。時には、議論の末に顔をまっかきさせ、徹夜に及ぶことすらあった。そんなときに彼らの言い合いで起こされた近隣の人々は、いぶかしげな目で彼らを見たものだ……こいつら昼間はいっしょに仕事している組立工やらパイプ工やら運搬工やらが、いったん夜になるとなぜ史学や哲学や政治

学の理屈を議論しはじめるんだ？<sup>1</sup>

朱学勤はこうした思想的な小グループを「民間思想村」[原文：民間思想部落]と称した。その主たる活動は読書と思索にあったという。

## 1-1 読書活動における時代的特徴

### 1-1-1 真の知識への渴望

1968年以後、膨大な数の大学生や高校生が農村・辺境・鉱山へ陸続と送り込まれ、農業や工業に従事して、進学を機会を失った。彼らのなかには、勉強や思索を好む者もあり、困窮した環境下においてながら、自発的に読書と自習をはじめたのである。

こうした青年たちの読書は完全に興味と環境によっている。なぜなら、目にできる図書は限られており、およそ手に入った本があればそれを読む、よい本が借りられればみんなで回し読みする、といった具合だったからである。先生の指導もなければ、当局のイデオロギーの制限も受けない。

彼らはだいたい政治と社会の問題に関心があった。多くの者が時事問題を議論したり社会・政治的な問題に大胆に探求を進めたりする勇氣を持っていたし、それがはやっていた。文学・歴史・哲学の書籍を読むほか、数学や外国語や経済学、あるいは美術などの知識を学ぶ者もあった。

こうした青年たちは社会の底辺にあつて、民間の痛苦と社会の弊害を体験した。たとえば、農民の貧困のありさま、集団的生産に対する農民の積極性の欠如、幹部と大衆における緊張関係などである。思考を深めんとして社会調査をおこなった者もいた。

### 1-1-2 辺境と間隙における生活

文革後期には文化的独裁主義が非常に強力であったが、その制限の重点は文化教育の部署と党・政府・軍の諸機関にあった。広大な農村や基層の工場などの社会的底辺は、そうした制限の辺境にあった。青年たちの読書は、こうした辺境あるいは間隙にあつて密かにおこなわれていたのである。しかし、反逆の思想は、いったん公安部門に見いだされれば、やはり危険であることはいうまでもない。

## 1-2 図書の出どころ

青年たちの読書はおもに個人所蔵の図書による。1972年に国家の政策が調整されたあと、図

---

<sup>1</sup> 朱学勤「思想史上的失踪者」徐友漁編『1966：我们那一代的回忆』北京：中国文联出版公司、1998年。321～338頁。

書館のいくつかは次第に開放され、書店ではランク別に図書が内部販売された。

#### 1-2-1 個人の蔵書

その出どころには次のような数種類がある。

##### 1-2-1-1 個人の所蔵品

民間の個人の所蔵品には、1966年に「四旧打破」の焚書に際して隠された個人の蔵書のほか、運動において幹部あるいは知識人の家庭から流失あるいは外に出た図書もある。そのなかの個人蔵書には紅衛兵が家宅捜査したときに持ち逃げしたもの、家長がつかまって批判闘争に連行されているすきに、その子女が自宅の蔵書をクラスメートや友達に回し読みさせたものもある。こうしたルートで、文革前に発行範囲が厳格に規定されていた内部書籍が青年たちのあいだに流通するようになったのである。

##### 1-2-1-2 廃品回収ステーションで購入された古本

当時、一部の町の廃品回収ステーションでは、一般市民に古紙として古本を売り出すことがあり、そのなかに家宅捜査由来のものや、図書館あるいは関係部署の資料室から整理され廃棄された図書、および下放や下郷に際して個人が古紙として廃棄したものが少なからず混じっていたのである。

北京の魏光奇の回想によれば、当時（1968年）、大学生が下放に配分されはじめると、出発間際に多くの書籍が廃品として売却された。読書好きの中高生はこの機をとらえた。海淀区〔北京大学の所在地〕に近い高校の廃品回収ステーションでは、1キロ0.26元の古紙価格で古本を売りに出していた。魏光奇は友達とともに、それぞれ10元出しあって、麻袋一つの書籍と文革資料を購入した。魏光奇は高校も大学も出なかったが、1978年に山西大学歴史学部中国近代史専攻の大学院を直接受験して合格した。彼が生まれてはじめて読んだ中国近代史の著作は、郭沫若の『中国史稿』（第4冊）と胡繩の『帝国主義と中国政治』であり、この2冊はともに麻袋に入っていたものだった<sup>2</sup>。

#### 1-2-2 書店

文革の初期、66年夏から70年まで、新華書店はいつもからっぽだった。毛沢東著作と中央から出された新聞・雑誌・単行本以外、販売できた書物は寥寥たるありさまで、マルクス・レーニンの著作ですら買うのは簡単でなかった。

70年以後、マルクス・レーニン主義の理論を学習せよとの毛沢東の指示や、批林批孔運動に対応するため、出版社はマルクス・レーニン主義の理論書や理論的な概説書、それに内外の歴史文化関係の書籍を陸続と出版あるいは再刊したり、文革前に出ていた図書を発行したりした。

---

<sup>2</sup> 筆者による1997年の魏光奇へのインタビューによる。魏光奇「文革时期读书生活漫忆」北京：『首都师范大学学报（社会科学版）』2003年12月増刊「中国近现代史专辑」、160～164頁。

72年にアメリカや西欧諸国との関係改善があって以後は、外国事情を紹介した図書および外国語学習書が翻訳・出版・再刊された。これらは大部分「内部発行」であり、しかもランクが分けられた内部発行であった。

内部発行は、普通の読者でも身分証明書あるいは紹介状で書店の普通内部図書の購買部に入って購入できた。そのほかに中高級幹部と高級別格研究部門〔研究専門職〕の購買部があり、より「内部」の書籍はそちらで販売していた。

こうした内部書籍が青年たちの手に落ちると、ものすごいスピードで友人圏内に伝わり、一冊の本がたいがい一団の人々に影響することとなった。

朱学勤の回想によると、当時、上海の福州路にあったある書店の二階には、「県団級」「地師級」「省軍級」の「内部書籍販売窓口」がそれぞれ分かれて設置されており、異なるランクの紹介状で入り、異なる内部書籍を提供していたという。1974年冬、河南省で労働者をしていた上海出身の知識青年である朱学勤は、「省軍級」の内部書籍を読むために、コネと出まかせで「省軍級」の購買紹介状を入手し、上海で「内部図書」を何冊か買うことができた。そのなかには、アメリカの中国研究者フェアバンク（John K. Fairbank）の『アメリカと中国』、文革前に出版の『西方資産階級社会科学学術資料選』（16冊）、『ソ連修正主義哲学資料選』（23冊）などがあったという<sup>3</sup>。

### 1-2-3 図書館

1966年8月から9月にかけて、紅衛兵の「四旧打破」運動において、学校図書館の蔵書が多く焼却・廃棄された。しかし、公共の図書館の多くはそれまで同様、基本的な蔵書を維持していた。

1967年5月から6月以降、大衆的な「大批判」を展開するために、北京図書館（いまの国家図書館）など少数の公共図書館が図書の一部を公開にした。このとき公開にされた図書は、科学技術関係をのぞいて、マルクス・レーニン主義の理論書が多く、人文社会科学の図書はあまり広い範囲ではなかった。

趙京興の回想によれば、67年から68年にかけて、彼は北京の中学生で、毎日のように北京図書館に本を読みに行っていたという。当時は、本を見に行く学生が多いわりに座席は少なく、座席を取るためには、早起きしてオーバーを着込み、早朝四時のまだ日が明けてないうちに行つて並ぶしかなかった。こうした読書において、彼は中国および外国の哲学・歴史・文学の著作を広く読んだ。さらに、図書館の常連の何人かに真の友人を見いだした<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 朱学勤「“娘希匹”和“省军级”——文革读书记」もと上海『上海文学』1999年第4期。朱学勤『思想史上的失踪者』広州、花城出版社、1999年、171～183頁。

<sup>4</sup> 筆者の2000年における趙京興へのインタビューによる。また趙京興に対する丁東のインタビューをおこなった文章も参照。『寻访失踪的思想者』天津教育出版社、1996年、134～142頁に載せる丁東「冬夜长考」。

1970年以後、公共図書館のほか、学校や大きな企業の図書館や図書室でも、一部の所蔵図書を公開にしたところが出た。70年から72年に上海師範大学（いまの華東師範大学）の卒業生で、政治思想的な問題から就職先の分配を待機していた王申西は、農村に下放して働いていたあいだに、幹部学校〔党幹部で批判された者のための再教育施設〕の図書館で『資本論』などのマルクス・レーニン主義の著作とその他の社会科学の書籍を読んだ。72年に上海市に戻ってからは、いつも浦東区図書館と上海図書館に行き、マルクス主義理論と社会学の書籍を漁り、図書館で何人かの読書を酷愛する青年と知り合い、読書と思索の友としたという<sup>5</sup>。

ただし農村や小さな町には通常、図書館がなかったから、その青年たちは図書館を利用できなかった。

当時、学校や職場の図書館や資料室は管理がいいかげんだったため、青年たちは図書館に無断で入り、図書を持ち逃げすることがしばしばあった。少なからぬ回想や自伝の文章でこの点に言及している。

1968年、広州第十七中学の中学生だった王希哲は、上山下郷運動〔68年12月に始まる大規模な学生下放運動〕を前にして、読書欲をはらすために広東省社会科学院哲学研究所の図書館に潜り込み、旅行カバンいっぱいの書籍を窃盗した。そのなかにはフォスター（W.Z.Foster）の『国際社会主義運動史—三つのインターナショナル』〔*History of the three Internationals; the world socialist and communist movements from 1848 to the present*の中国語訳〕、『トロツキー自伝』〔中国語訳〕、『ソ連共産党（ボルシェヴィキ）党簡史』〔*Краткий курс истории ВКП(б)*の中国語訳〕、『経済学辞典』〔不詳〕などの書籍があったという<sup>6</sup>。

当時の青年が書物を盗んだのは読書のためであり、売るためではなかった。文革期間中には、盗みを働かなければ本が読めない状況になっていたものであり、これは当時の思想的な禁断と青年たちの読書欲がいかに強かったかを表している。

### 1-3 青年に重要な影響を与えた図書

当時、青年のあいだに流行し、かつ重要な思想的影響を与えた書籍には次のようなものがある。

#### 1-3-1 マルクス・エンゲルス・レーニン・毛沢東の著作

大衆によって組織的に編集印刷され、かつ広く流行した毛沢東の未公開の講話や原稿は、毛

<sup>5</sup> 金凤「血写的嘱托」、王申西著、金凤・丁东編注『王申西文集』所載、209・215・220頁。筆者が2001年に王申西の旧友である傅申奇に対しておこなったインタビューにもよる。1975～1976年、傅申奇は上海の青年労働者であり、図書館で王申西と知り合って思想的な交流をした。

<sup>6</sup> 王希哲『走向黑暗』（インターネット版）、第四章。本書は香港の民主大学出版社から1996年に出版された。

沢東の個性に富んで生き生きした多面的な思想を青年たちに提供した。新聞などに報道された型にはまったような説教にくらべて、青年たちへの魅力を備えていたのである。

青年たちのなかには、当局の理論的解釈にとどまることをよしとせず、マルクス・レーニンなどの原著を読むようにして、マルクス・レーニン主義の原著のなかから、社会政治の矛盾に対するより深い解釈を探索しようとした。

鄭光昭は回想で次のように述べている。知識青年のなかには、毛沢東の著作ではなく、マルクス主義の原著に熱中する者もいた。その背後には何層かの思想的な原因があった。「意識の深層では、すでに毛沢東とその思想に疑問を抱きはじめていた。意識の表層では、それを承認していなかったにすぎない」。「マルクス主義の経典的な作者の原著に、自分たちの疑問に対する答えを探していた、いったい真のマルクス主義とは何なのかと」。

文革後期の青年思潮（いわゆる異端の思潮の大部分を含む）は、多くマルクスの学説を分析と批判の理論的根拠としたのであった。

#### 1-3-2 その他の人文社会科学の著作

1960年代と70年代には、内部発行物が二度に亘って系統的に出版された。一度目は1963年以後で、ソ連などの国々の共産党とのイデオロギー論争に応接するため、インターナショナルリズムのいろいろな思潮（いわゆる修正主義の主たる思潮を含む）の代表作、および西側の学者がこうした思潮を研究した著作などが翻訳出版された。こうした内部発行物のうちの「内部の参考に供する」図書は、発行範囲が厳しく制限されていた。それには二種類ある。

一つはイデオロギーの理論的図書。一律に灰色のカバーで、その他の装飾はないため、「灰皮書」とよばれた。

もう一つはソ連や西側現代文学思潮を反映した図書。一律に黄色のカバーなので、「黄皮書」とよばれた。

1971年以後、調整政策によってアメリカなど西側諸国との往来が始まり、また批林批孔などの運動の必要から、歴史・哲学・政治経済学の書籍が次第に「内部発行」として提供されるようになっていった。

厳格に制限されていた内部の発行物が青年の手に伝わると、強烈な思想的ショックを引き起こし、彼らが外部世界を認識し、文化大革命を考え直し、政治的な迷信を打破する一種の精神的な来源あるいは思想的参照系となったのである。

#### 1-3-3 内部の読み物がもたらした思想的なショック

青年時代の読書を回想するとき、少なからぬ人が内部発行物のもたらした思想的なショックについて言及している。

作家の徐明旭は、読書が自身の思想的な転変にこんな作用を及ぼしたと次のように述べてい

る。1967年「年末、私は当時の大学生造反派のなかでかなり流行していた二冊の本を読んだ。それはグナワルダナ (Theja Gunawardhana) の『フルシチョフ主義』[Khrushchevism の中国語訳] と、アメリカの記者のストロング (Anna Louise Strong) の『スターリン時代』[中国語訳] であった。両方ともスターリンの大粛正の血なまぐさい描写が私をぞっとさせ、毛主席と文革を想起させられた。それで私は忽然と悟った……それからというもの、私は二度と造反派の行動に参加しなかった」<sup>7</sup>。

魏光奇はこう回想している。1968年前後、思想が活撥に働いていた北京の中学生のあいだに、ユーゴスラビア共産党の主要人物[副大統領]だったミロヴァン・ジラス (Milovan Dilas) の『新しい階級』[中国語訳] が伝わった。彼がはじめ目にしたのは、筆写された抄本であり、活字版を見たのはもっとあとだった。この本は、ソ連および類似の社会主義国家は、マルクスが予言したような、生産力が高度に発展した基礎の上にある共産主義とはまったく違って、「官僚主義」がこの社会の統治階級であり、圧迫階級であり、搾取階級であって、労働者階級・人民大衆とは対立的な地位にある、としていた。ジラスのこの考え方は、当時の毛沢東の「永続革命」理論と通じる部分があり、文革中に血統論によって排斥と迫害をうけた非「紅五類」の学生[家庭が労働者・貧農下層中農・革命幹部・革命軍人・革命烈士の出身を紅五類といい、それに入らない者を指す] や、幹部の子弟とのあいだに甚大な社会経済的な格差のある労働者・農民の子弟からすれば、大いに引き付けられる意見であった。当時、魏光奇と彼の友人たちは、この理論に触れて非常に興奮し、一年あまり何度となく思考してきた文革の起源問題が解決されたように感じた。当時の北京の高校生に伝わったものには、ほかにトロツキー (Leon Trotsky) の『裏切られた革命』[中国語訳] があった<sup>8</sup>。

河北省の白洋淀に下放した北京の知識青年の潘婧は、次のように回想している。「そのころ、私たちは一生懸命になって文革前に出版された灰皮書と黄皮書を探し回っていた」。「結局、十数年の教育が私たちに馴染ませた思考様式を突破させてくれたのは、二冊の灰皮書の刺激のおかげであった。それはトロツキーの『裏切られた革命』と、もう一冊はジラスの『新しい階級』だった<sup>9</sup>。

ただし、北京・上海の一部青年たちの圏内以外では、こうした「灰皮書」に接触する機会は稀少だったのであり、青年たちの多くは読んだことがないどころか、聞いたことすらなかったのは指摘しておくべきであろう。

<sup>7</sup> 蕭潇「文化革命中的地下读书运动」からの転載、インターネット雑誌『华夏文摘』「文革博物馆专集」(28)、1997年10月。

<sup>8</sup> 筆者の1997年における魏光奇へのインタビューによる。魏光奇「文革时期读书生活漫忆」北京：『首都师范大学学报(社会科学版)』2003年12月増刊「中国近现代史专辑」160～164頁。

<sup>9</sup> 潘婧「心路历程——“文革中的四封信”」『中国作家』1994年第6期。転載が、徐晓主編『民间书信 1966-1977』合肥：安徽文艺出版社、1999年、68～81頁にみえる。

## 2 「民間思想村」

「民間思想村」とは、文革期間中に青年たちを主として、秘密裏に、あるいは半秘密裏に読書と思想的探索をおこなった小さなグループ群をいう。こうしたグループ群は、形には拘らず、友人同士の集まりや、書籍の回し読み、文通などいろいろなやり方があった。当局の弾圧を避けるために、基本的に秘密あるいは半秘密状態であった。論じ合った内容は参加者の志向によっていろいろあり、政治と社会問題以外に、文学や美術もあり、なかには数学を議論するグループもあった。

以下に「思想村」の実例を紹介する。

### 2-1 北京の趙一凡サロン

北京の趙一凡は、一群の才能ある青年たちと連絡し、ある程度影響力のある、「サロン」ともよばれる思想文化グループを北京で立ち上げた。

趙一凡は 1935 年生まれ、幼年期に傷病で下半身不随となった。小学校をたった三ヶ月しか行っていないが、ねばり強い独学で大学の文科課程を修了した。正式な仕事もなく、出版社の依頼で文字の校正をするパートタイム労働者であった。文革が始まると、家に引きこもっていた。

趙一凡は、自分が所蔵する図書や民間文学の原稿・思想資料などを、意気に感じては青年たちに貸して読ませた。それで彼の家は青年たちが書籍を交流させる場所となり、彼の周りに文学を愛し思考につとめる青年たちがたむろするようになった<sup>10</sup>。

趙一凡サロンの主たる活動は文化面にある。とくに、文革時期の民間の詩歌と小説の成長に独特の貢献をした。趙一凡サロンの読書と文化活動に参加した青年には、「白洋淀詩人グループ」の主たる構成員、たとえば北島（趙振開）や芒克などがいた。

1975 年 1 月、趙一凡およびいつも彼の所に出入りしていた十数人は逮捕されて投獄された。この事件は山西・陝西・河北などにも飛び火したが、文革終了後に名誉回復された。趙一凡は釈放後ふたたび、民間で主宰する文学雑誌『今天』の編集・出版に積極的に協力し後押しした<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> 趙一凡と彼のサロンについては、廖亦武『沉沦的圣殿』乌鲁木齐：新疆青少年出版社、1999 年。杨健『中国知青文学史』北京：中国工人出版社、2002 年。筆者が王好立にインタビューした際、王好立も趙一凡との交遊に言及した。

<sup>11</sup> 徐晓「无题往事」、廖亦武『沉沦的圣殿』乌鲁木齐：新疆青少年出版社、1999 年、162 頁。警察方の資料によると、1975 年 1 月、趙一凡の家宅捜査で、手紙類は 889 件、外国の古典的文学書のマイクロフィルム 46 枚、ネガフィルム 1 箱、文字テキスト写真 53 枚、アルバム 1 冊、スチール写真 303 枚、原稿 59 枚、メモ 450 頁、ガリ版刷り 489 頁、文化大革命の各種印刷品 7 束（そのうち 1 束は装丁されて書冊になっていた）、内部文献 1 束、内部刊行物 3 束、「中央首長講話」2 束、文革の地下新聞 7 束、提要・調査提要・読書メモ・農村問題研究などの材料、さらに紅衛兵の印章・自作の謄写版・カーボン紙など、全部を運ぶに



これと類似する街中のサロンには、北京の徐浩渊のサロンや上海の小東楼サロンなどがある<sup>12</sup>。

## 2-2 「李一哲」とその壁新聞

李一哲とは、広州の青年を主とする、社会・政治問題を議論する一グループのことである<sup>13</sup>。

「李一哲」グループの中心メンバーは、王希哲・李正天・陳一陽という三人の青年と中年幹部である郭鴻志であり、ほかに十数名が彼らの活動に参加していた。

王希哲と陳一陽は文革の初期に広州の高校生だった。卒業後、農村に下放し、1972年以後、前後して広州に戻った。

李正天は、広州美術学院の高学年の学生だった1968年、林彪を批判したために批判闘争にかけられて拘禁にあい、1972年に釈放されて、学内で仕事の配分を待っていた。

郭鴻志は、広東人民放送局の幹部であり、李一哲の活動に参加したときすでに40歳余りだった。彼は1968年に林彪を批判したために拘禁され、監視下での労働をさせられていた。

大衆運動が低調になったころ、李正天・王希哲・陳一陽・郭鴻志はマルクス・レーニン主義の著作や社会科学の書籍を真剣に読み合わせするようになった。

彼らは読書以外にも社会調査をおこなった。農村にいた期間、王希哲と陳一陽は農村および農村政策について身を切るような経験をして、農村問題に関する知識青年たちの議論に参加するようになった。李正天・郭鴻志は広州の青年たちとともに、広東省の文革時期において大衆に打撃を与えた冤罪事件について調査研究をおこなった。

林彪事件発生後、王希哲と陳一陽はこの事件の教訓と啓発について熱く語り合った。彼らはこう考えた。党と国家が今後二度と騙されず、ファシスト式の蹂躪に遭わないようにするためには、党内の民主と広範な人民の民主との回復を提唱すべきである。それと同時に、李正天と郭鴻志は法治制度を建設すべき切迫感をも強く抱いていた。

1973年11月、彼らは「社会主義の民主と法制について」という論文を書き、「李一哲」と署名、12月上旬に毛沢東に郵便で送りつけ、ガリ版で出来後は友人たちに配布して意見を求めた。1974年11月には、この文章を簡略にして壁新聞にし、広州の繁華街に貼りだしたところ、ものすごい数の人々がそれを見に来る大反響をもたらした。

広州市党委員会と広東省党委員会は、これは反動壁新聞だと宣言、広東省委員会は大小百カ

---

は小型トラック二台分になったという。楊健『中国知青文学史』北京：中国工人出版社、2002年、289頁による。これらの資料は文革終了後に趙一凡に返還されたが、趙一凡死後に大部分はお手伝いの女性によって古紙として売却されてしまった。

<sup>12</sup> 印红标『失踪者の足跡—文化大革命期間的青年思潮』香港：中文大学出版社、2009年、242～243頁を参照のこと。

<sup>13</sup> 筆者の1999年における李正天へのインタビュー、および2001年における王希哲へのインタビューによる。ほかに王希哲の自伝『走向黑暗』（電子版）。

所あまりの批判会議を組織した。しかし、広東省委員会はこんな指示も出した。李一哲という者に答弁させ、席上で水を飲ませ、腰掛けに座らせ、マイクをもたせることを許すと。広東省の内部から伝わった話では、これは上層部の指示だとのことであった。

このとき、批判会議に参加した大衆の多くは、李一哲に対して支持あるいは同情の気持ちであり、李正天・陳一陽らが反駁するときには、話に合わせて大笑いし、大会の組織者に地団駄をふませた。熱血な青年たちは彼らの名前を慕ってやってきて、李一哲を困む青年の輪は急速に大きくなっていった。李一哲の壁新聞「社会主義の民主と法制について」は、批判大会の罵声の下で歩き出し、全国に伝わっていったのである。

1978年12月末、中国共産党広東省委員会は「李一哲」事件の名誉を回復した。

その後、王希哲は続けて「民主の壁」運動に参加し、再び逮捕されて投獄された。出獄後はアメリカに渡った。李正天・陳一陽・郭鴻志は広州に留まった。

李一哲と思想的に近く、かつ李一哲の壁新聞の影響を受けた者に、四川省万県の青年たち数名が1975年に立ち上げた「マルクス・レーニン主義研究会」がある。彼らは反革命集団として弾圧されたが、文革終了後に名誉回復を得た<sup>14</sup>。

### 2-3 河南駐馬店の青年グループ

1969年から河南省駐馬店の農村で、大学卒業生の陳一諮を中心とする数名の知識青年たちが活躍するようになった。彼らは権力者にあらたまって挑戦しようとはせず、体制内で経験を積み重ね、体制の内外の有識者と広い連絡関係を築いた。農村における思考と実践が、のちに彼らが農村の体制改革に身を投じるのに、堅実な基礎を打ち立てたのであった<sup>15</sup>。

陳一諮は1940年生まれ、1959年に北京大学に入学、1965年に毛沢東に対して「党と政府の仕事に対する若干の意見」という三万字余りの論文を送りつけ、党と国家の政治運営における非民主的現象を批判したため、「批判教育」を受けさせられた。

文革が始まると、毛沢東に手紙を送った一件が再び採りあげられて批判された。1967年、学友とともに林彪・江青を非難し、「反革命集団」とされて批判闘争にかけられた。

1969年に陳一諮は、卒業後に農村に行くことを求めた。下郷する前に、北京の製紙工場において1キロ0.3元の値段で、古紙回収のための図書の中からも本を購入して来た。そのなかで影響が大きかったのは内部発行物〔翻訳本〕だった。たとえば、前述の『新しい階級』、イギリスの『修正主義』、ホック (Sidney Hook) の『マルクスとマルクス主義者—曖昧な歴史的遺産』、アメリカのサミュエルソン (Paul A. Samuelson) の『経済学』などである。こうした本を読ん

<sup>14</sup> 印红标『失踪者の足迹—文化大革命期間的青年思潮』397～402頁に詳論した。

<sup>15</sup> 筆者の2001年における陳一諮へのインタビューによる。

だことで、彼は当局のマルクス主義に対して疑問を抱くようになったのである。

陳一諮は、農村の底辺で働きながら調査研究をおこない、仕事の方法を調整した。このため生産がすぐに向上し、当地の幹部と農民の信用を勝ち得て、人民公社書記に任命された。

彼は河南省新蔡県などの場所で調査をおこない、三年の自然災害〔大躍進政策当時の旱魃など〕における目を覆わんばかりの事実をはじめて知った。そして、こんな感慨を持ったのであった——農民の生活はひどすぎる、まるで人の生活ではない、「左傾」の誤った路線が人を滅ぼすのだ、と。

陳一諮が河南の農村に到着したあと、大学生や高校生も陸続と彼のいる知識青年ステーションにやってきた。そのなかには高級幹部の子弟もいた。たとえば、かつて劉少奇の秘書をやり、文革終了後には共産党中央書記所書記を務めた鄧力群の息子である鄧英洵がいた。

陳一諮と友人たちは農民学校を開き、農民に教育を施したり、農村と国家の形勢について討論したりしたとともに、広く青年たちと交流した。

1971年の春節、河南から北京に戻った陳一諮は、胡耀邦が北京で療養していると聞いて、面会に行った。そして胡耀邦に農村問題についての自分の考えを報告した。胡耀邦は「左傾」の誤りが氾濫していることを慨嘆しつつ、陳一諮の探求を励ましたという<sup>16</sup>。陳一諮は鄧英洵との関係から鄧力群とも会う機会があった。

文革終了後、陳一諮は北京に戻ってほどなく中共中央の農村発展研究組の組長・中国経済体制改革研究所所長・中国政治改革研究会副会長に就任し、趙紫陽のブレーンの主要メンバーの一人とみなされた。しかし1989年の政治混乱に巻き込まれ、「六四」〔天安門事件〕後にアメリカに渡った。

## 2-4 血にまみれたサロン

寧夏共産主義自修大学の例は、思想的な探求の結果、鎮圧された典型である。

1969年11月、大学や高校を卒業したばかりで、町で就職したり農村に下放したりしていた13人の寧夏地方の青年たちが、共産主義自修大学を立ち上げ、マルクス・レーニンと毛沢東の著作および国内外の歴史研究書を読み合って、現実の諸問題を思考・研究して『学刊』という刊行物を自主出版した。学習会や討論において、何人かの青年は林彪の講話のいくつかをけなし、時局の悪弊に対して非難した。1970年3月、そうした言論が当局に見いだされ、共産主義自修大学は「反革命組織」「反革命集団」と断定された。構成員のうち3人が「反革命」罪で死

---

<sup>16</sup> 陳一諮「一片丹心照大千—紀念耀邦逝世十五周年」（2004年3月9日）による。この文は、もとアメリカの『世界周刊』2004年清明節号に発表され、次の頁に転載されている。  
[http://www.dajunzk.com/huyaob.htm#\\_Toc120291060](http://www.dajunzk.com/huyaob.htm#_Toc120291060)

刑に処され、3人が懲役刑、そのほか6人が逮捕拘禁されたり職場から隔離されて批判闘争にかけられたりした。文革終了後、この事件は名誉回復された<sup>17</sup>。

### 3 思想潮流とその影響

「民間思想村」は独立した批判性のある思想の揺籃であり、中国の思想史上、看過できない地位にある。

#### 3-1 主たる思想流派

「思想村」が育んだ批判性のある思潮の思想傾向には、おもに次の二つがある<sup>18</sup>。

##### 3-1-1 政策批判

政策批判の思想流派は、「文革」以来の誤った政策を否定した。その批判には、文革以前の「左傾」政策に言及するものもある。この流派の思想は、中国の社会主義経済建設の実践をそのよりどころとし、党内の実務的な方針や政策を肯定した。その多くの観点は、批判されていた劉少奇・鄧小平ら指導者の実務的な主張から啓発を受けており、実質的には毛沢東晩年の誤った思想的「左傾」を否定するものであった。そうした思想の来源は、1956年の中国共産党第八回全国代表大会の政治思想路線にあり、後のいわゆる中国的な社会主義と理論的にだいたい符丁が合っている。

政策批判の出発点は、経済・社会・文化の発展と、人民の生活改善であり、通常は基本的な政治体制の変革に触れない。この思想流派の方向は、文革終了後の鄧小平の改革開放と基本的に方針が一致していた。それゆえ、文革後にこうした観点を持っていた者は体制を支持し、体制内改革に乗り出した。陳一諮や張木生らがそうした例である。

##### 3-1-2 制度批判

制度批判派は、中国にはソ連と同じく、社会の上に乗っかって社会を統治する「官僚特権階級」「幹部階級」が存在し、それゆえにマルクスが予言したような社会主義社会ではないと指摘するところに重点がある。彼らは、社会の病弊の根源はソ連式の世界社会主義にあると考えるのである。

この流派の出発点は、社会の平等・公正・人民主権などの社会主義の基本的価値であり、こ

---

<sup>17</sup> 姫承明「宁夏为惨遭林彪“四人帮”迫害的青年昭雪」『人民日报』1978年9月29日による。『宁夏日报』1978年8月7日も参照のこと。陳川「追求真理的青年」上访通讯编辑室編『春风化雨集』（下集）北京：群众出版社、1981年、63～73頁。

<sup>18</sup> 批判的な思想潮流については、印红标『失踪者的足迹—文化大革命期间的青年思潮』、507～547頁を参照のこと。

れを目標として、現実の社会制度に対する批判と変革の政治的要求を提案し、社会主義の民主と法制に賛同する。その理論的根拠は、社会主義に関するマルクスの学説であり、方向性は民主的な社会主義である。

彼らの思潮は鄧少平の「中国的な社会主義」理論に合致しなかったため、文革終了後もやはり体制外にあり、「ブルジョア階級自由化」思潮と指弾された。実際には、この思潮は「社会民主主義」的な特徴を備えており、「自由主義」とは異なる。1979～1980年のいわゆる「民主の壁」や、基層の人民代表選挙の活動において、類似の思想を見ることができる。

### 3-2 文革後期の思想的探求の影響

文革期間における読書と思索活動は、単に青年たちに知識を学ばせたのみならず、ものを考える精神を培った。

青年たちは読書活動で知識を増やした。文革終了後に大学の入学試験（大学入学全国試験）が復活した。この試験をパスして大学に入った青年たちの大多数は、文革中に読書と独学に頼って文化・科学の知識を吸収したのである。

自発的な読書と学習は、インディペンデントな思索の精神を育み、この世代の人々に強い批判性と創造性を備えさせた。たとえば、文学の分野では「白洋淀詩人グループ」や「朦朧詩派」が、文革中に当局から独立しておこなわれた文学活動から生まれたものである。

文革後期の青年たちの思索活動は、いまだ幼稚ではあったが、当局から独立した民間の批判的思潮（相異なる政治的観点も含む）をあらためて啓発し、文革時期の思想的独裁の根幹を瓦解させ、1976年清明節の大衆抗議運動〔第1次天安門事件〕の思想的基礎を築いた。それはまた、改革開放、とくに思想解放運動にとっては、思想的準備を与えたのである。こうした思想潮流は、文革期間には地下の流れであったが、改革開放後に公開のものとなり発展しはじめた。かくして、政策批判思潮は鄧少平の改革思想と合流し、社会批判および自由主義的な思潮は、1978～1979年の西単商店街の「民主の壁」や自主出版物を生み出し、中国の相異なる政見を持った運動へと変化していくのである。

#### [訳者付記]

本稿は、北京大学国際関係学院の印紅標教授の論文「文革后期青年的读书和思想探索(1969—1976)」の翻訳である。この論文は、2010年12月に本研究所特別研究助成鈴木健郎グループ「フランスと東アジア諸地域における近現代学芸の共同主観性に関する研究」が専修大学 神田校舎でおこなった印紅標教授の同タイトルの講演にもとづく（訳者はその講演で通訳を

つとめた)。本訳稿で [ ] 内は訳者が便宜的に補った部分である。

本稿からも理解できるように、中国現代の政治・社会状況には、文革時期の思想的な探索に端緒を持つ要素が少なくない。これを理解するためには、文革時期の社会や思想の動向をはっきり認識することが必要である。本稿は文化大革命時期の思想動向について、社会史をふまえながら思想史的にとらえようとしている。従来の文革研究は政治史を中心におこなわれてきており、社会史を視野に入れた思想研究は、重要でありながら看過されてきたように思われる。その点で、印紅標教授の研究は中国現代史研究において日本のみならず、世界的に注目されているといつてよい。印紅標教授のそのような研究スタンスについては、本稿で参照されている印紅標教授の主著『失踪者の足迹—文化大革命期间的青年思潮』（香港：中文大学出版社、2009年）に対する訳者の書評（『専修大学人文科学研究所月報』第244号、2010年3月）で言及したことがある。

なお、現今の中国では、文革そのものの研究は政治的に抑圧されており、詳細な研究はそれほど多くおこなわれていない。また、この面の資料も閉鎖的な状況であり、整備・公開されてはいない。本稿で当時の一次資料が扱われておらず、多くが著述や口述にもとづいているのはそのためである。

今回の印紅標教授の講演は本学において二度目であり、2008年12月におこなわれた一度目の講演の内容は、「中国における文革研究と文革の記憶」と題して、『専修大学社会科学研究所月報』（第559号、2010年1月）に鈴木健郎訳で発表されている。